



TITLE:

7 ニホンザルのアメーバ感染に関する疫学研究

AUTHOR(S):

橘, 裕司; 小林, 正規

CITATION:

橘, 裕司 ...[et al]. 7 ニホンザルのアメーバ感染に関する疫学研究. 霊長類研究所年報 2010, 40: 137-137

ISSUE DATE:

2010-09-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166783>

RIGHT:

の一部は第 115 回日本解剖学会総会・全国学術集会(盛岡)にて発表した。

6 アカゲザルの中樞神経系におけるタキキニン受容体発現の検討

鈴木秀典, 永野昌俊 (日本医科大・薬理学)

対応者: 大石高生

タキキニン作動性神経系は両生類から霊長類まで種を超えて広く存在し、情動、記憶、運動制御など多様な中枢神経機能を修飾すると考えられているが、霊長類における本神経系については十分明らかにされていない。本研究ではタキキニン受容体の 1 つである NK-2 の発現を検討し、霊長類におけるタキキニン神経系の生理的役割を探ることを目的とした。4-7 歳オスアカゲサルから脳組織 RNA を抽出し、これを用いて NK-2 mRNA をクローニングした。この塩基配列を基に PCR プライマーを作製し、分取した各脳組織部位の一部において NK-2 mRNA 発現量を定量した。従来げっ歯類においては NK-2 mRNA の発現は高次中枢ではほとんどみられないとされていたが、アカゲサル一次体性感覚野において、既に発現解析を行った NK-1 mRNA の 2 倍程度、一方基底核においては半分程度、それぞれ発現することがあきらかとなった。これらの結果はタキキニン受容体拮抗薬の精神疾患治療薬としての開発を行う上で重要な情報をもたらすと考えられる。

7 ニホンザルのアメーバ感染に関する疫学研究

橘 裕司(東海大・医), 小林正規(慶応大・医)

対応者: 松林清明

最近、赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) とは異なる病原アメーバ *E. nuttalli* が、サル類から見つかった。本研究では、ニホンザルにおける腸管寄生アメーバの感染実態を明らかにすることを目的とした。

鹿児島県屋久島町のヤクシマザル、和歌山県白浜町椿由来と青森県むつ市脇野沢のニホンザルから新鮮な糞便を各 30-40 検体採取し、PCR 法によってアメーバ類の検出同定を行った。その結果、*E. chattoni* 感染が最も多く、椿群で 100%、屋久島群で 80%、脇野沢群で 63% が陽性であった。次いで大腸アメーバ (*E. coli*) が屋久島群の 73%、脇野沢群の 23% に検出されたが、椿群では検出されなかった。また、*E. nuttalli* は椿群で 60%、脇野沢群で 23% が陽性であったが、屋久島群の検体は陰性であった。赤痢アメーバと *E. dispar* はいずれの地域の検体からも検出されなかった。以上より、ニホンザルにおける感染アメーバ種には地域差が大きいことが確

認された。また、2 ヶ所由来の *E. nuttalli* は分離培養でき、rRNA 遺伝子の配列にわずかな違いがあることが判明した。今後、更に調査地域を広げたい。

8 野生ニホンザル・オスグループにおける長期モニタリング調査

宇野壮春((合)宮城・野生動物保護管理センター)

対応者: 半谷吾郎

過去 8 年弱の調査から金華山のオスグループは一つの群れ周辺でワカモノ(4-7 才)を中心としたメンバーシップを保ち、それらが年齢を重ねることで群れオス(加入オス)となる傾向にある。調査当初から観察していた個体はオスグループを経て、2006 年 8 月に群れオスとなり、その後アルファオスへととなった。その個体は 2010 年 1 月の段階まで対象群で確認されていたが、2010 年 3 月には隣接する別群の周辺で確認された。その時は対象群の若い出自オスと行動を共にしているのが確認されている。この事は他の群れから来た加入オスとその群れで生まれた出自オスの移出のきっかけになっている一つの事例として捉えることができる。金華山島において、加入オスが関与する出自オスの移出、移出後に形成するオスグループの存在、オスグループのメンバー確立とそれに続く群れへの加入、そして加入オスの群れ離脱が再び出自オスの移出に関与するという、一つのサイクルが見えてきた。

ただ、まだ理解し難いオス同士の社会関係が残されているので今後の継続した調査が必要である。

9 野生ニホンザルのワカモノオスの出自群離脱前後の生活史に関する長期追跡調査

島田将喜(帝京科学大・生命環境)

対応者: 半谷吾郎

3 頭の A 群出身のワカモノオスが出自群を移出するプロセスにあることが明らかになった。

イカロス(6 歳)は夏以前には A 群内と A 群周辺オスグループで確認されていたが、秋以降 C₂ 群周辺オスグループで確認されるようになり、2010 年 3 月現在もそこにとどまっている。アシモ(6 歳)は昨年度から現在までずっと B₁ 群周辺オスグループで確認され続けている。フミヤ(5 歳)は夏以前には A 群内で確認されていたが、秋以降 B₁ 群周辺オスグループでアシモと一緒にいるのが確認されるようになった。しかし、2009 年 11 月の観察を最後に A・B₁・C₂ のどの群れ内にも、周